

古墳にあいた穴

西都原 16 号墳は、13 号墳と 46 号墳の中間付近にある円墳である。その墳丘には、下に空間があることで生じたと思われる穴が、数年前から目立ってみられるようになった。穴があいた理由について、古墳時代の地下式横穴墓があってその天井等が崩落した可能性や、ウサギやキツネ等の動物による掘り起こしの可能性等が予想されたが、実際のところよくわからない。ひとまず穴の周りをロープで囲み、人の立ち入りがないようにしていたわけだが、墳丘の保護や訪問者の安全管理のうえで根本的な対応が必要であることや、地下式横穴墓であった場合、



16 号墳の歴史的な位置づけの上で重要な要素となることに加え、古人骨や副葬された鉄製品等が風化の危機にさらされている可能性もあったため、2013 年度に発掘調査を実施することとした（写真は 16 号墳調査中の様子）。

発掘調査ではまず、穴の中に流れ込んでいた墳丘盛土を取り除き、空間の壁や床を探すことから始め、16 号墳盛土にかかる空間の天井がアーチ状であること、盛土部分で陥没が発生したことがわかってきた。さらに流入土を除いていくと、地山をほぼ垂直に削り込んだ壁面や平らに仕上げられた床面が見えはじめ、その地山壁や床面を追いかける要領で、空間の構造を探っていった。

そしてついに、ちょうど空間の入り口に相当する位置に、墳丘の外側に向かって人が通れる程度の幅で黒っぽい土が埋まっていることがわかり、地下式横穴墓の入口かと調査メンバーで盛り上がった……のも束の間、床面や入口部分を埋める土の中から、近代以降のガラス瓶・花瓶・ビニール袋・布・鉄板等が数多く出土することとなった。さらに、入り口付近の埋め土は、スコップの刃が立たないほどに硬く展圧されている状況が見られたのである。

これらの状況を総合的に検討した結果、16 号墳にあいた穴の原因となった空間は、近代以降において墳丘を利用した半地下空間（倉庫等）であり、風土記の丘整備事業の際に埋められたものと推測された。調査後には、空間を丁寧に埋め戻し、本来の墳丘に復した。

今回の発掘調査では、残念ながら……古墳時代の地下式横穴墓の発見ということにはならなかった。しかし、古墳に対し後世の人々がどのように向き合い、また再利用したかの一端を知ることができたと同時に、空間の壁を観察することで古墳時代における墳丘盛土の状況等を把握できた点は、今後の古墳群整備の上で重要な情報収集となった次第である。

16 号墳は、来訪者の危険や墳丘の損壊が無事に回避され、再び静かな時間の中に戻された。古墳群の整備は、多くのことをあきらかにしながらこれからも続いていく。

（藤木 聡）